

書写力向上をめざして

—基礎・基本とその応用—【第61回】

「書写の要素」について ⑥〇 〈書く速さ⑤〉

山梨大学名誉教授

宮澤 鷲州

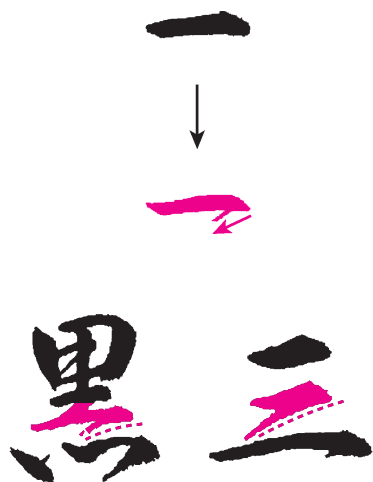
先号では、行書の基礎的・基本的な特徴である点画や字形の丸み、点画の連続や変化について述べました。今回も引き続き、点画の変化について、前回解説できなかったその他の変化など、様々な字例を挙げて述べてみたいと思います。



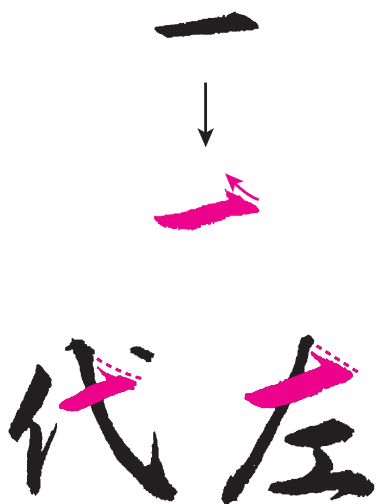
行書の特徴(点画の変化②)

行書の点画の変化について、先号では、特に顕著に変化する「左右の払い」と「曲がり」を解説しました。今回はその他の基本点画についても、どのように変化するかを見てみましょう。

変化する。例「三」「黒」

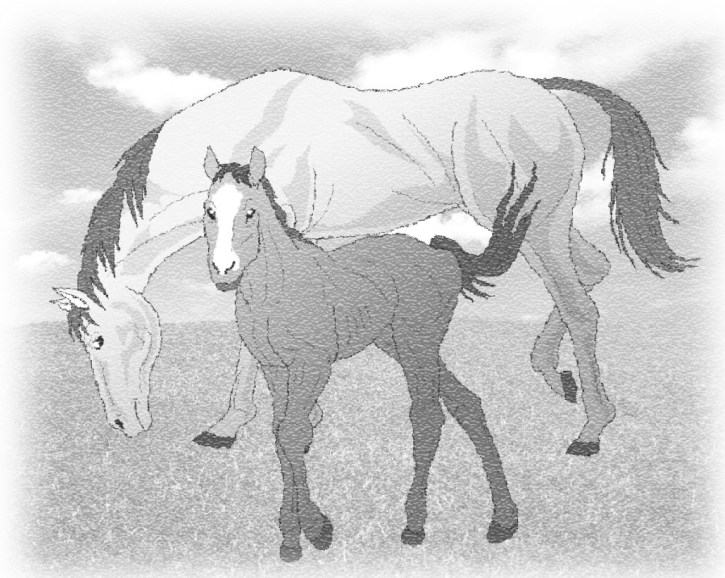


上の画につながる場合は終筆が左上へのはねに変化する。例「左」「代」



①横画—終筆が止めの場合

下の点画につながる場合は終筆が左下へのはねに



② 横画—終筆がはねの場合

下の点画につながる場合は左下へのはねが、折れて左払いに変化する。例「写」「学」



右方向の点画につながる場合は右上へのはねに変化する。例「仁」「行」



④ 縦画—終筆が軽い止めの場合

下の点画につながる場合は左払いのように変化する。例「土」「虫」



③ 縦画—終筆が止めの場合

左方向の点画につながる場合は左上へのはねに変化する。例「木」「牧」



上の点画につながる場合は左上へのはねに変化する。例「王」「金」



⑤ 縦画—終筆が払いの場合

楷書でも「最終画の縦画は払ってもよい」とする許容があるので、小学校書写においてもこの許容の書き方で指導することが多くなりました。この書き方は、次の文字への早い移行をめざす行書的な書き方です。したがって、行書でもほとんど変化がないと捉えることができます。ただし、次の文字の一画目にさらに近づこうとする場合は、垂直への払いではなく、左払いに変化する場合があります。

終筆の縦払いが左払いに変化する。例「千」「川」

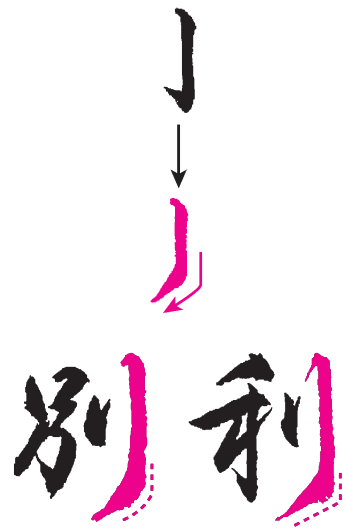


⑥ 縦画—終筆がはねの場合

左の点画につながる場合は楷書のはねより長く、左上に払うように変化する。例「小」「寺」



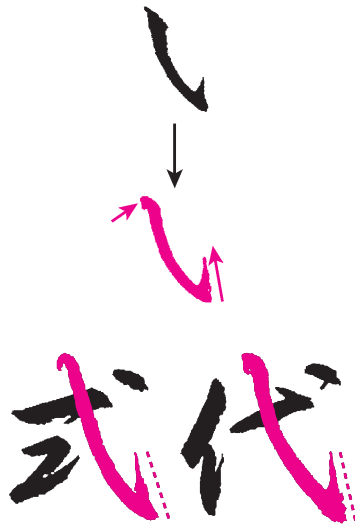
最終画の場合は左下への払いに変化する。ただし、左払いとは異なり、送筆部を垂直に下ろし、筆圧を十分かけたのちに左に払う。例「利」「別」



⑦ 反り—左回転の場合

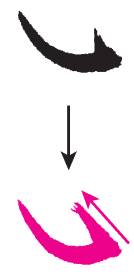
楷書と大きな変化はないが、始筆は下から受けるように入筆し、終筆のはねは長く変化する。

例「代」「式」



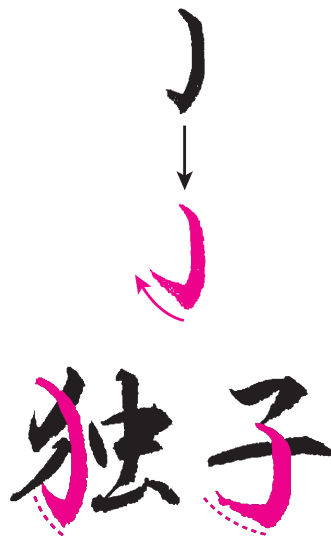
⑧ 反り—「心」に見られる左回転の場合

終筆のはねが長く変化する。例「心」「必」



⑨ 反り—右回転の場合

次の画につながる場合、終筆のはねが、長く変化する。例「子」「独」



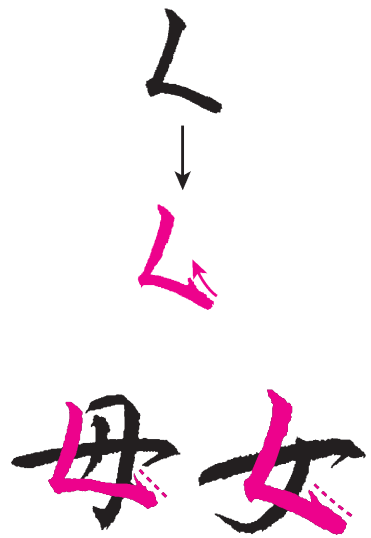
最終画の場合は左下への払いに変化する。ただし、左払いとは異なり、送筆部を垂直に下ろして、筆圧を十分かけたのちに左に払う。例「手」



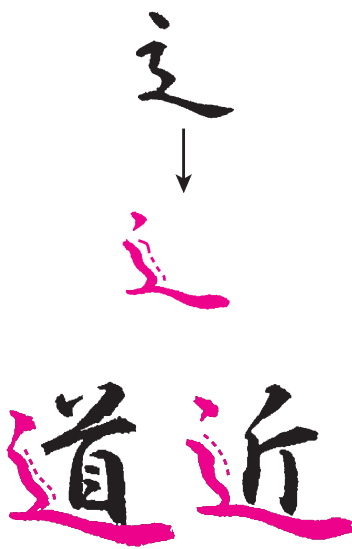
⑩ 折れの場合

折れは複合画であるため、終筆の変化は、他の点画とほぼ同様に変化します。したがって、ここでは注意を要する字例をあげてみます。

女・母の一画目の場合は斜画の終筆は、上へのはねに変化する。例「女」「母」



シンニョウの二画目の場合は折れの部分が、曲線的に変化する。例「近」「道」



⑪ 点の場合

点の種類は多く、行書になるとそのほとんどが次の画に向かう方向にはねたり払ったりします。ここでは注意を要する字例について挙げてみます。

縦点（ウ冠などの一画目の点）は斜め点に変化し、終筆ははねに変化する。例「宇」「空」

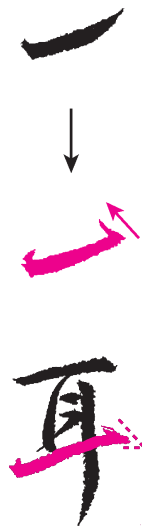


斜め点（右下方向）は次の画に向かう方向へのはねに変化する。例「犬」「栄」

斜め点（左下方向）は次の画に向かう方向へのはねに変化する。例「心」「魚」

⑫ 右上払いの場合

「耳」「シ」「ン」などに用いられる右上払いは、多くは土偏、金偏、サンズイなどのように旁部への移行を早めるために書かれる画なので、これら右上払いについては、すでに行書的な書き方と言えます。したがって、行書になっても変化は見られません。ただし、「耳」の右上払いはこれに該当しないため、終筆を上にはねあげるように変化することがあります。



終筆を上にはねあげる。例「耳」

新学習指導要領（平成29年3月公示）では、小学校低学年で楷書の基本となる点画の種類やそれぞれの書き方を学ぶことになりました。今後、楷書の点画への意識が強まることは間違いないと考えます。

こうした動向を踏まえると、中学校での行書学習においても、これまで以上に楷書の点画と行書における点画の変化とを対比して捉える学習方法が有効になるものと考えます。

なお、「点画の連続」と「点画の変化」の両者は、切り離せない関係にあります。行書は楷書よ

りも速く書くことから、点画と点画との間に連続性が高まります（私は、これを「次画移行力の高まり」としています）。さらに、連続することによって点画の送筆や終筆に変化が生じるので、両者に密接な関係が生じるのは当然のことです。しかし、「連続」と「変化」をそれぞれ異なる特徴と捉え、点画を変化させることで連続を促す方法をとることもままあります。これでは点画を変化させて書く理由が不明確になってしまいます。

そこで、行書指導においては、両者の関係を次のような順序で解説すると分かりやすいと思います。

ア 行書は楷書より速く書く書体である。

イ 速く書くため、点画と点画が連続するように書く（「次画移行力」を高めて書く）。∴連続にはルールがある（むやみに連続させない、直接連続・気脈による連続など）。

ウ 連続することで、点画の書き方が楷書とは異なる変化が生じる。∴変化にはルールがある（連続によって生じる終筆の方向や筆使いの変化など）。

今回は、点画の省略や筆順の変化などについて述べる予定です。